
下僕賞「当選のお知らせ」 （なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）

紅雨椿葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「下僕賞「当選のお知らせ」（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）」

【Nコード】

N1609BA

【作者名】

紅雨椿葉

【あらすじ】

一人暮らしでのんびりと生きている男の隣に現れたのは、見たこともない面をしている奴だった。……泥棒？（＊お題をFortune Fate様よりお借りしています。目次頁にリンクをしています）（＊加えてこの作品は、作者頁に書いてある、ブログで連載している小説の転載です。作者本人によるものであります。）

No. 1

一人暮らしの野郎のポストに、そんな手紙が入っていたのは、忘れもしない。

鬱陶しい雨の日だった。

世間は正月で、どこの番組を見ても錦鯉かと見まごう程の鮮やかな着物やらおめでとうございますやら言い合って、非常にお祝いムード。

自由業の俺といえ、何時もと同じように寝転んで、ちょっと奮発したビールとつまみを片手に一杯やって。

年末の大掃除なんてしてなかったから、一息ついたらそろそろ動こうかなんて思いながら、でも後でと先延ばしにしている、自堕落の代名詞とも呼べる代物だった。

しかし、幾ら一人暮らしとはいえ、生活する以上この状況はいただけなかった。

.....洗ってる皿、なし。

.....洗濯済みの下着、なし。

.....湿気ていないタオル、なし。

.....カップ麺、枯渇。

まずいだろう、コレ。

生活できない。流石に。

よくもまあここまでいろいろ溜めたもんだ。

足を踏む場くらいしかスペースがない。

今まで避難していたベッドも、丁度お茶を零してしまったし。

ああそういえば、洗ってるコップがないのもリストに入るな。
自分ながらに感心する。

これでお袋がいれば、そんなのんびりしてる場合じゃないでしょと怒られるところだが、一人暮らしを始めた頃から一回も連絡を取っていないので、いい加減愛想を尽かされていると思う。

「いや、でも年末に仕事があったからいけないんだよな。大掃除なんてやってられなかったし。一年の疲れを取るために必要な休息だったんだ」

誰に向けるでもなく、ただひたすら現実逃避のために、ひとり言を呟いた。

ちなみに、この惨状をまだ大丈夫だろうと樂觀できる勇気は俺にはない。

「仕方ねえ、掃除するか。とりあえず……洗濯機回すか」
補足しておく、我が家は一軒家だ。

都会ではなく、とある県の境にある。家賃が安いことと、窒息しように近い家が回りにないことを好んで借りている、ボロいと言いたいようがない、冴えない一戸建てだ。

友人からすれば、庭付きの一戸建てというのは羨ましいのだそうだが、住んでる本人にとっては管理が面倒で仕様がな。

草が生え放題、庭木を荒れ放題にさせておくと、さりげなく家主から注意される。

人の腰くらいにまで草がのびてしまうと、もう廃墟そのもの。

ある意味絶景だ。そうそう見れるもんじゃない。

話がそれた。

つまりは、こんな夜間であろうが朝方であろうが、騒音で悩ますんじゃないかと心配しなきゃならない隣人はいないということだ。

さて、この我が家を綺麗にするためにかった時間は丸二日だった。

た。

夜に手をつけて、疲れて放り出して、翌日丸一日をつぶしてようやく人を招待できる家となった。

招待する奴なんていないけど。

そうだ。

こんなに疲れきって、そういえば新聞をとってないと外に出たときから、すでに災厄は始まっていたといえる。

建てつけが悪いのか古いせいかなんだか知らないが、軋むドアを押して、寒い空気を被ったというのに。

すっ転んだ。

それはもう、芸人真っ青な素晴らしいすべり。

何だったら見にきて笑いやがれと毒づきたくなるほどの、華麗な回転と尻餅を披露した。

観客がいないのが残念だ。

そうだとも、負け惜しみじゃない。

この目の端に浮かぶのは、雨のせいだ。

羞恥や痛みのせいじゃないとも。

呆然と玄関の前に座り込んでいたのだが、やがて尻が冷たくなってきた。

氷が張っていた。

なんて素晴らしい年明けだ。

痛む腰をさすりつつ、ポストに向かった。

編集者から、友人から、去年三回くらいしか行っていないドラッグストアから、ガソリンスタンドから、動物病院からの付録カレンダーなんてのもあった。

我が家にペットはいない。

それでも組み立てるタイプで、デザインも可愛らしかったので、後で作ろうと眠っていた工作魂がうずいた。

少し高揚した気分のまま、次の葉書をめくる。

有名なファッションブランドの割引券つきの広告。

・・・・・・半纏姿の、時代丸無視の恰好を笑われている気がして、非常に気分が悪い。次。

腹立ち紛れに、階段を音を立てながら登っていると、新聞の隙間から何かが落ちた。

舌打ち混じりにかがむと、白い封筒が枯れ草の上に落ちていた。拾い上げて、眺め回してみても宛名だけで、差出人の名前も住所も書かれていない。

「何だあ、こりゃ？」

疑問を口に出した所で返事が帰ってくるはずがない。

とりあえず早く温い部屋に入って、それから中を見てやろうと身を翻した。

すっ転んだ。

「まったく、何だってこんな目に。厄年か、今年は？」

ひやりと襲う言いようのない不快感、微妙な柔らかさが何度味わっても、恨めしい冷湿布を腰に貼ると、思わず短く声を出してしまう。

まったく。

こんな情けない姿、他の奴らには見せられない。

見せるような変態でもないが。

そんなどうでもいいことを考えていると、さっきの封筒を思い出した。

蟬封を模したシールに留められ、さほど厚みはない。

こんな洒落た手紙を送ってくる友人に心当たりはないし、広告でもなさそうだった。

とすると・・・・・・

考えても埒が明かない。

そう思った俺は、以前誰だったかに貰ったペーパーナイフを部屋から探し出し、ようやく封を切った。

薄いベージュ色の紙に、褪せた黒インクで、二行だけ何か書かれている。

下僕賞「当選のお知らせ」

（なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為に行われました）

「はあ？」

げぼくしょう？

当選したのは嬉しいが、げぼくしょうってなんだ。

そのまえにげぼくってなんだっけ。

下？

え、何。

一日だけメイド貸し出しキャンペーン、なんてやってるのか？

そもそも近くにメイドカフェなんてあったっけ。

でも、それならもう少し早くこれを見たかった。

ぴかぴかに磨き上げた家を見て、蟬封されていた封筒が恨めしくなった。

いや、しかしメイドとはいえ汚い家に上げるのはどうだろう。

人間性を疑われそうだ。

と、そこまで考えたとき。

人の気配を感じた気がして、振り向くと、人形が座っていた。

いや、人形ではなかった。

生気に満ちた曇りのない、深いエメラルドの瞳。

薔薇色の頬。

メイプルシロップのような、茶色がかった金の髪。
勝気そうな凛々しい眉。

すっとした鼻、引き結ばれたふっくらした唇。

繊細な指。スラリとした肢体。

細部にいたるまで、何もかもが美しかった。

どんな者からの鑑賞、賛美にも堪えうる芸術品。

こんな陳腐な台詞でどれほど伝わるかは疑問だが。

いや、断っておくが俺は変態じゃない！

変態ではないが………それでも、思わず息を呑み、呆けて
しまうほどの美人がそこにいた。

ぼうっとしていると、人形が眉を片方だけ上げながら問うた。

「お前がぼくの僕か？」

「………男かよー。——じゃなくてっ」

僕って、こっちか！

No. 2

大きな丸い目は髪の毛と同じ、少し茶が入った金でくつきりと縁取られ、俺を見据える目は湖底のように澄んでいる。

眺めている分には申し分ない。

そう、あくまで眺めている分には。しかも遠くから。

こんな間近で見ると自己嫌悪でどん底まで落ち込みたくなる。

この歴然とした差、差、差！

・・・・・・いいなあ、こんなだったら人生楽しいだろうなあ。

と、俺には縁がない人生を想像していると、美少年はいらいらした口調で聞いてきた。

柳眉をひそめて、美少年にはふさわしくない皺が浮かんでいる。

「聞いているのか？ お前がぼくの僕か、と尋ねている」

「はいはいはい、きーてますよ。これに見覚えある？」

「何だこれ・・・・・・何て読むんだ？」

例の便箋を見せると、全く知らない様子で自ら手に取っていたが、どうやら読めもしないらしい。

とぼけているつもりか？

ちよつと腹立たしくなって、目の前でゆっくりと読み上げてやる。

「げぼくしょう」

「げぼくシヨ」

一言読み上げて一息つくたびに、たどたどしい口調で俺の真似をして。

「とうせんのおしらせ」

「盗泉のオシラセ」

「なお、ちゅうせんはおうぼのうむにかかわらず」

「ナオチュー線は横暴濃霧ニカ瓦ズ」

「むさくいにおこなわれました」

「むさ栗にオコナーれました」

「わざとやってない？」

そう聞くと、わけが分からないといった顔をされた。

そんな阿呆を見るような目で俺を見るな！

「フツ―に喋れるのに、音読すると誤変換起こすって、どういう教育環境に……」

半ばあきれ返って顔を上げると、目が合った。エメラルドの瞳。

ああ、そうだった。

「日本人じゃないもんな。会話だけは何とかできるのか。君、名前は？」

美少年はちよつと渋るように目を泳がし、遠くを見つめ、しばらくするとようやく口を開いた。

消え入るような声だった。

「りっか……」

「リッカ？」

商品名とか、都市名に使われそうなイメージだった。

「チップ」と同じ発音だなとかどうでもいいことを口にしてはいたが、頭は猛スピードで考える。

リッカなんて奴は知らない。

見たところ年は……幾つだよ。俺は日本人でも同姓でも年を測るのは苦手なんだ。

中学生かな。高校生じゃねーだろ。いや、でも日本人は童顔だからそう思うだけでもしかすると小学生……いやいや、何にせよそんなことはどうでもいい。

俺の知り合いにこんな酔狂な真似をする奴はいねーし、知り合い

の子どもは全て把握している。とすると本当に無作為の抽選の結果というヤツか。迷惑極まりないじゃねーか。どこの会社だ！
というかこの抽選の目的は何だ！

心で考えつく限りの罵倒を正体不明の誰かに吐き散らすと、ようやく落ち着いてきて、また他の事を考え始める。

そもそもコイツは何処から入ってきたんだ？

窓が開いていたから、そこからか。寒いんだよこの野郎。窓くらい閉めやがれ。っていうか鍵閉めてなかった俺って凄い無用心だな。まあ一人暮らしの野郎の家に入る物好きなんかいやしな・・・・・・・・・・
いるじゃん、ここにっ。

一人で乗り突込みを続け、また脱線するのを避けるために静かに呼吸を整えた。

待て、落ち着け。

とりあえず重要なのは・・・・・・・・・・

「何で此処に来たんだ？ 誰に言われて此処に来た？」

質問と同時に先ほどまでリッカがいた位置に目をやると、見慣れた家具が映っただけだった。

もしかして夢だったのかと期待半分に探すと、当の本人はごそこそ何か作業をしている。

あれは・・・・・・・・・・

「あ！ 俺が楽しみに取っておいた付録をっ」

動物病院からのカレンダーを、嬉々とした様子で組み立てていた。俺の非難の声に気づくと手を止め、きょとんとした顔でこちらを見返す。何が悪いのかという顔。ったく、子どもが何でも許されると思ったら大間違いだ。

しかしここで怒鳴るのも大人気ないとしか言いようがないし。

「あのなあ……」

結局、俺は脱力したままそれだけ言うのが精一杯だった。

「ここにいるお前が僕だといわれたから、来た。ここに行けと前もって写真も、地図も見させられた。誰かは……名前が分からない」

急に喋りだした。

それは、さっきの質問に対する答え。

「じゃあそいつの居場所は？」

「覚えてない」

「じゃあ親は？」

「オヤ……いない？」

「何で疑問系なんだよ。ああ、もしかして意味が分からない？ 君を生んで……うーん、君を、好きだといってくれた人、とかいないの？」

俺がさっきまで癪だと思っていた、上から口調はすっかりなりを潜めていた。

自信なさげに、不安げに。

節目がちのエメラルドグリーンは濃くなって、見た目よりも一層幼くみえる。

「……いない」

「不味いこと聞いた？ ええと、ごめん」

非常に気まずい。

そんな暗い過去を持っているとは思えなかったし。

まさかどっかの王家とか貴族とかの末裔じゃないだろうな。

それで、妾腹の生まれで物心ついたときから苛められてきたーとか。

だから親の顔も知らずに今まで――

いやいや、小説の読みすぎだ。

確かに王子様みたいな雰囲気だけど、こんな東の島国の、現実主義者が集う経済大国日本にそんなヤツが都合よくいるもんか。

というかその前に此処に来るわけがない。

我ながら馬鹿な発想だとは思ったが、一気に進んでしまった想像にかちりと当てはまってしまうのは、やはり物憂げな雰囲気が漂っているからなのだろう。

とはいえ、いくら何でも此処に来られてもどうしようもないんだよ。

そりゃ目の保養にはなるが、他人に居座られちゃ居心地悪いのは言うまでもない。

冷たいと思うが、出て行ってもらうしか――

非情な判断を下そうとしたとき、リックがまたカレンダーを手にとるのが見えた。

どうやら気に入ったらしい。

ミシン目の所を切り外すのはどうやら上手くいったようだったが、またさらに細かく切る所は苦戦して、びりりと裂けてしまった。

ああ、もう・・・・俺がやってたら綺麗に切れたのに。

それでもなんとか全体を切り終わった。そのころには用紙はあちこちささくれだって、見るも無残なものだ。

そうしてから、差込口のところに紙を入れようとする。

それがまた上手くいかない。

やってやろうと手を伸ばすが、頑として手を離そうとはしなかった。

意地になっているらしい。

先ほどとは違って、好奇心と期待に胸を膨らませている様子を見れば、無理強いする気も起きやしない。

まあいいか。頼り癖がついたら、将来ろくな大人にならないし。諦めてそのまま見守ることにした。

作りはじめて約二十分程度。完成。

どうだとばかりに誇らしげに見せたサッカーボールに似た卓上カレンダーは、お世辞にも綺麗ではなかったけれど、なんだか微笑ましくて、よくやったと誉めてやる。

俺らしくもない。

情を移したら、その時点でもう駄目だ。

なんだかペットみたいな言い草だなと苦笑いしつつ、床に座ってリツカと視線を合わせる。

雰囲気が変わったことに気づいたのか、リツカがテーブルにカレンダーを置いた。

「——いいよ。こんな寒い日に追い返すわけにもいかねーし。いずれ誰かが引き取りに来るだろ。それまでここにいるか？ メシくらいなら食わしてやるよ」

リツカは当然だという顔をした、ように見えた。

了承したらしく、目を閉じたままゆっくり頷く。

あわせて柔らかかそうな髪の毛がふわりと舞った。

No. 3

「リッカー！」

「なんだ」

「何だじゃないだろ！ お前、皿洗いくらいまともにできないのか！？」

リッカが家にやってきて、数ヶ月が過ぎた。

例のサッカーボール型カレンダーは何回か位置を変え、時には埃をかぶっている面があったりする。

正月にやってきためでたい客人は、未だに引き取り手が見つからない。

すでに客人扱いしていないのはエプロン姿のリッカを見ていただければ一目瞭然だが、しかし、俺は決して天涯孤独な少年をこき使っている非情で計算高い親父ではないのだと、そこだけ訂正しておく。

リッカはもともと下僕賞当選などというふざけた通知と共に我が家に来た少年だった。

行き着いた先にいる人物が自分の「僕」だとしか言われずに、ここまでやってきたという、これまたふざけた話だ。

俺が下僕？ 冗談じゃねえ。

しかしそんな型破りの出会いをしたのだが、一緒に暮らすうちにお互い慣れてきて今では居候している親戚の子どもくらいのポジシヨンに昇格している。

分かりにくいなら、あれだ。

とにかく慣れてきたっていうことだけ分かってももらえればそれで

いい。

リツカは見たところ中学高校あたりの顔立ちをしているのだが、学校にいかずともいいらしく、一日中ぶらぶらしている。

縁側に座って日向ぼっこをしている時だつてあるし、庭に遊びに来た野良猫を手懐けようと必死だったり、庭の草抜きをしていたり、俺の見よう見まねをして、掃除機をかけていたりもする。

なんというのか好奇心旺盛で、俺がやる事全てが珍しいらしく、何かにつけて自分がやりたいと言うようになった。

まあ家事を手伝ってもらうのは大歓迎なので、好きにやらせている。

食器を洗うのだって、リツカがやりたいというからさせておいたのだが、俺の手間が省けた代償に、一週間に何か一つは割ってくれというオプショントきである。最近はこちらと間隔が開いてきてはいるが。しかし！

とうとう俺は悲鳴をあげた。

「だからもうやめろって！ このペースだとあと三月もすれば俺ん家から食器が消えてなくなるんだよ！」

呻いて頭を抱えた俺に、リツカは何も言わなかった。

一分ほどは黙った後、ようやく口を開いた。

「ぼくはこれをやりたいんだ。今度はもう割らないから。駄目か？」
う、と俺は後退る。

俺を見つめるエメラルドグリーンの瞳が悲しそうに揺れ、柳眉は八の字型。

「……………分かった、分かったから。絶対落とすなよ。今度やったらどうなるか分かってるな？」

何もかも了承した様子で頷いたリツカだったが、本当に分かっているのかは疑わしかった。

けれど俺はいちいち確認するのも面倒で、仕事に戻ることにした。薬缶をセットし、ガスのスイッチを捻ろうとすると、リッカが近寄ってくる。

「お前はまだ火は扱っちゃ駄目だからな。そこで見てろ」
「分かってる」

ぷうと膨れっ面をしてみせたリッカだったが、摘みを捻って火がつくと、物珍しそうに見つめた。

何がそんなに楽しいのか全く分からん。

「先生、ご在宅ですかー」

「おう。っつーか矢倉、いい加減チャイムの存在に気づけや」

「何回も言いますが先生、チャイム壊れてます」

「あれ、そうだったか」

悪い、と口先だけの返事をしておくと、後ろでため息をつかれた。そういえば前にも同じような会話をしたっけ。

しばらくペンを走らせて、とうに冷えてしまった珈琲をすすった。

「だったらノックぐらいしろよ」

「先生……これ何度も言いますが、反応遅いです」

「いいじゃねえか。何も言わないよりマシだろ」

私に対しての嫌味ですか、と苦々しく言った矢倉は、本人いわく無口なのだそうだ。

俺には到底信じられなかった。

あれだけ口煩い奴が無口だって。

おかしいったらありゃしない。

そこまで考えると、矢倉はゆっくりと声を張り上げた。

どうやら俺は、今のを口に出していたらしい。

「言っておきますが。私は、ちっとも原稿を上げてくだらない作家のために仕方なく喋っているんですよ。そうでなければ用もないのに話しかけたりしません」

「お前友達少ないだろ」

「そ、そんなことありませんよっ」

声の上擦る。凶星だな。

「ちゃんといますよ、友達くらい」

「くらいってなあ、お前。友達は大切だぞ？ 二次元とかネットと

かの友達もいいもんだがやっぱ生身の友達は」

「普通に三次元にもいますよ！」

なまじ肌が白いので、すぐに顔が赤くなる。

怒った矢倉は、それ以降話しかけてもしばらく答えてくれなかった。

No. 4

「クラ、ミモにいじめられたのか？」

「おい何人聞きの悪いこと……」

「リツカさん……。大丈夫です。苛められてなんかいませんよ。ええ、たとえ締め切りギリギリになっても一向に筆の進む様子が無い作家にどれだけ待たされようとも、友人がいないだろうと罵られようとも、私は負けません」

お湯が沸いたのだろう。

新しく淹れた茶を、俺と矢倉の分だけ湯飲みに注いで、お盆で運んできたリツカを認めると、傷心の矢倉は泣き真似をしながらリツカに訴えた。

ていうか、古。

今時筆使ってる奴そうそう見ないぞ。

いくら書道が好きな人でも日常で使わないだろう。

そこまで考えると恨めしそうに、聞こえてますよそれに筆は言葉の綾ですと釘を刺された。

ヤバイ、また口に出してたのか。

リツカは盆を置くと、よしよしと俯いた矢倉の頭を撫でてやる。

「泣くな、クラ。ぼくも友達だろう？」

「リツカさん」

「クラ！」

ひしっと抱き合う二人に、俺はげんなりと視線を向けた。

「ったく、矢倉。お前リツカに変なこと教えるなよ。ぱっと見、危ない大人だぞ」

「そうですか？」

そうですかじゃねえよ。成人男子と未成年の男子が抱き合ってる時点で更に危ないだろ。

いい忘れていたが、矢倉は編集者の端くれだ。

姓は矢倉、名は光久。

俺は角田社に時たま読みきりの小説やらイラストやらを投稿していて、その担当が矢倉というわけだった。

外見を説明すると、チャームポイントは眼鏡と目元にある泣き黒子だろうか。

茶味が強い髪に、ほとんど茶色に近い色素の薄い瞳。

白い肌で170前後の身長を見れば、鼻肩目に見ても頼りない大學生だ。

童顔も相まって、下手すりゃ高校生にも間違えられるかもしれない。

そのせいか、いつも不機嫌そうに眉間に皺を寄せ、口元は引き結ばれている。

詳しく聞けば、視力が極端に悪く、対人恐怖症気味なのだそう。俺とは普通に話しているじゃないかといえば、貴方は人の警戒心をことごとく打ち破ってくれるんですよと喜んでいいのか分からない返答を返されたことがある。

なぜ編集なんぞやってるんだと聞けば、本好きも理由の一つではあるが、校閲や編集といった仕事は人とあまり接触しないだろうと思っただけから。

甘い。

いくら情報化社会とはいえ、仕事で人とのコミュニケーションは不可欠だ。

そんな矢倉だったが、根はかなり単純で素直な性格をしているので、編集長にからかわれている場面も多々見受けられる。

家族構成が女性だらけのせい、以前は女性向けのほうの担当だったらしいが、刺激的な場面は辛すぎたらしく、転属願いを出したとか。

しかし、末っ子の彼は四人いる姉の影響で、仕草や感情表現の仕方が女性らしかったりする。

つまりはリツカに悪影響を与えている根源がこいつだ。

今リツカが身に着けているのは、矢倉のお下がり、白いレースで縁取られているタンポポ色のエプロン。ピンクじゃなければ別に男が着てもいいだろうというその基準がよく分からない。

男だってピンクが好きな奴はある。そんなに珍しくもないだろう。気分が高揚するし、元気が出る暖かな色だし。俺だって何も色の好みにまで口出しする気はないし、手芸や、編み物や、料理や、可愛い小物が好きな男を気持ち悪いなんて思わないさ。

けれど！

リツカは妙に似合ってしまうのだ。洒落にならない。

矢倉にはリツカが来た経緯なんかも話してあるので、それならばと自分の子どものころの服を持ってきてくれたのだが、ほとんどが女物だった。

何でこんなものばかり持っているんだと聞くと、姉たちのお下がりを着させられていて、家の中だから構わないかと普段着に使っていたとか。

英才教育の思わぬ弊害だ。

リツカが女装趣味になったらどうしてくれよう。

ぼつりともらした一言に、友人からは、んなわけねーだろと鼻で笑われたが、いそいそとエプロンをつけるリツカを見ると本当に要らぬ心配ばかりが募っていく。

俺がため息をつくとき、矢倉は雰囲気を感じ取ったのか、苦笑いをしてるのが分かった。

「あ、寝ちゃいましたね」

「寝たか」

振り向くと、リツカが矢倉の肩に頭をもたれかけて眠っていた。眠っている時は天使の寝顔。この表現がここまで似合うヤツもそうまい。

そういったら、いつだったか矢倉に呆れ顔をされたことがある。

親馬鹿だって？

一体誰の事だ。コイツには本当、手を焼かせられてんだ。

No. 5

物は壊すし、何事も真正面からぶつかって問題を起こすし、正々堂々としているけど成功したためしがないし、いつも元気な分落ち込みようは半端ないし、俺の言う事なんか聞かないし、いつも冷や冷やさせられてくたただこっちは。

・・・・・・なんだよその、何もかも分かってますみたいな生温かい目は。

俺は渋々、面倒を見てやってるだけだ。

そうさ、餓鬼は嫌いなんだからな。

「夜もしっかり眠ってるんだけどなあ」

「眠りが浅いんですかね？」

というのも、時折糸が切れたように眠りだすのだ。

確かな周期もない。定期性はあるが、予測が出来ない。しかし、観察によれば沢山動いて、よく考えた後に眠りだす事が多いと思う。ということとは、リッカの脳が長時間の活動に耐え切れずに、必要最低限以外、何もかも活動の停止して休息をとっているのだと考えた方が無難だろう。

眠り姫病、と密かに呼んでいるその症状には、さして害はないので今のところ放っている。

病院にいくかと尋ねたこともあったのだが、本人が行きたがらないのだから仕方ない。

これまでを考えると一時間以上はこのまま眠り続けるだろうから、体が冷えないようにベッドに連れて行くしかないだろう。

「貸して」

「はい」

未だに矢倉に抱きついたままのリツカの体を預かると、横抱きにする。

初めは背中に背負っていたのだが、そうしているとベッドに寝かせにくいので、こんな状態になった。

効率的な問題があるとはいえ、この格好は流石に恥ずかしさ感が否めない。

「先生、意外と似合ってますよ」

「るせえ……」

俺は餓鬼が嫌いなんだ。

はいはい、と何か言いたげな笑みを浮かべた矢倉は、当に冷めてしまったお茶をすすった。

なんだか納得がいかない。

「ほい、できたぞー」

「お疲れ様です、先輩」

「んー、あとは読みきりの小説の挿絵だっけ。まだ読んでないんだよな……」

差し出された茶をすすった次の瞬間、思ってもみなかった甘味に噴出していた。

「な、んだこりゃ!？ 矢倉ー!」

「はい？ どうしました、先生」

どうしましたかじゃねえ、何だこの甘い茶は、と言いかけたが、どうも距離がおかしい。

部屋の外から顔を出している矢倉。

じゃあさつき茶を出した矢倉はどこに？

「うっわー……お前か、深川」

「はいー。深川都、ただいま参りましたー！」

お疲れじゃないですか、肩でも揉みましようか？　なんて甲斐甲斐しく世話を焼いてくれるのは、深川都。

俺が振り向いたのとは反対方向で、いたずらっ子のような顔をしているが、これでも成人している。

矢倉よりも背が低いので恐らく170センチには達していないだろう。

猫っ毛を小さく束ねた後頭部の尻尾がチャームポイントだろうか。大きな目に高めの声。しかし、深川はれっきとした男だ。

部活の後輩だった男で、大学が終ると時たまここにやってくる。

「いや、別に大丈夫だから」

「そうですかー？　最近先輩、ますます色白くなってきてませんか？　駄目ですよ、外に出なきゃ」

「お前は俺のお袋か」

やだなー、なんて少し頬を染める深川。

別に褒めたわけでも何でもない。

「外といえば、また草が生えてきましたねー」

「そうだよなあ・・・取らなきゃ、取らなきゃって思いながらもやりたくねえっつう・・・」

「じゃ、オレがやりましようか？　軍手とか鎌とかありますか？」

「いやいや。流石に悪いし、今相ッ当、日差し強いから。んなことする前に勉強とか部活しろって」

「いえっ！　そんなことじゃあないですよ、先輩の家を美しく保つ事も、オレの立派な仕事です！」

なんだかいろいろ間違っている気もする。

けれど、草取りをやってくれるという申し出は、ちょっと・・・
・いや、かなり嬉しい。

「・・・本当に？」

「本当です」

「悪いな、都」

「先輩……！　じゃあ、お仕事の合間にこれでも食べてくださいっ」

冷やしておきましたから、と差し出されたのはプリンだった。

「おー、お前の手作り？」

「味見はしたので、食べられるとは思いますが。ちょっと見た目が悪くて」

すみません、と頭を下げた深川ではあったが、カaramelのかかり具合はそれを十分にカバーしていた。

ふるふるとした動きと輝きが素晴らしい。

「んじゃ早速、いっただっきまーす！……んあ？」

「都、こいつを甘やかすなど何度も言っているだろう」

「アンミツ！　お前、よくも俺のプリンを――！　スプーン返せ、こらっ、食べるな！」

「甘い……」

「ったり前だろーが。だからスイーツとか、甘味だとかいってんだろ。ほらもう返せよ、俺一口も食ってないんだから」

手を伸ばすとアンミツは、分からないと言いながらも一回、口に運んだ。

奪い返そうとすると、複雑な顔をした深川がもう一つスプーンとプリンの皿を運んできてくれる。

「すまん。手間かけたな」

「いえいえ、先輩のせいじゃありませんよ」

「そうか？　そーだよな、全ては目の前の無表情アンミツ男のせい」
はああ、と深川とため息のタイミングが重なった。
アンミツは恨めしそうに、わざとらしい、と呟く。

「大体、俺の名前はアマミツだ」

「分かりましたよ、お姫さま」

「ああ言えばこう言う・・・・・・・・」

よっぽどお前のため息の方がわざとらしいよ、と言ってやろうと思ったが、まあ、このプリンに免じて許してやろう。

No. 6

先ほどからアンミツアンミツと呼んでいるこの男は天満白姫。

俺の幼馴染で、中学高校と一緒に同級生である。

アマミツ、をあんみつ。

シラヒメ、を姫。

あだ名を付けやすいこの名前は、彼の祖父が付けた名前らしい。天に一面にある星を表す、天満星という美しい単語が連想できるこの名字にちなんで、彼の家族には星の名前やら、植物の名前やらを贈られる事が多いらしい。

白姫という名前も冬を司る女神のことをいうのだとか。

女神なら明らかに女の子に付ける名前じゃねえの、とか思うのだが、男ばかり生まれる天満家に今度こそ女の子が生まれることを願って、生前から名づけた名がこれ。

今となっては、姫というのがとてもじゃないがキツイお年頃になってしまった。

だがしかし、悔しい事に顔の造作は立派だし、足も長い。

恐らく紅顔（もしくは厚顔）の美少年時代には、白姫という名前もさぞかし似合っていたことだろう。

ったく。

顔はいい、足も長い、背も高い、頭がいい、出来すぎ君かこいつは。

ああでも、性格はそんなにいいほうじゃないか。

天は二物を与えずって本当だな。

「聞こえてますよ、先輩……！」

「え、俺今の口に出してた？」

必死にこくこく頷く深川。

と、矢倉。

ん？ おお、矢倉。

「いたのか」

「いましたよ！ さっきからここに。ずっと無視して……」

「悪かったよ、でもアンミツが――」

「それは後にしてください、先生。挿絵の締め切り、いつか分かっていますよね？」

脅しのようにじりじり迫ってくる矢倉の顔は、目が少し血走っていた。

疲れてるな。

「分かってるってエ、明日だろ？ この分なら楽勝楽勝」

「今日です」

「だろ、だからだいじょ……はあ、今日？ 明日じゃねえの！？」

あああやっぱいいい、と頭を抱えながら、矢倉はそれでも自分を取り戻しながら言った。

傍で苦笑いする深川と、アンミツのため息がやけに響く。

「今日です！ 私は何回も言いました、聞いてなかったほうが悪いんです。再度言っておきますが、延びませんからね」

延びませんからね、を一文字ずつ区切られると、ドリフよろしく金だらいが降ってきたような気がした。

頭が痛い。

「あ、なんだか頭が痛いな……」

「延びません」

「・・・・・・・・・・・・・・・・いたーい」

心も痛い、なんて呟きながら、早速作業に取り掛かる。

挿絵なのだから、一枚で大丈夫だろう。あとはどのシーンを取り出すかだ。

全体を読んで選定までに恐らく一時間もかからない。うん、今日中に終る、やっぱり大丈夫。流石俺、大丈夫だ俺、頑張れ俺。

呪文のように言い聞かせる。

ナルシストになりたいわけじゃないのだが、こうでもしないと気持ちに挫けそうだった。

無理やりテンションをあげないと、終りそうにない。他にもちまちまとした仕事があるから、この仕事に一日を使ってしまうとかなりきつくなるってのに。

遠くで鳥が鳴いた。なんてエ物悲しい鳴き声。

「あ、これも覚えてますか？ 時代のイメージとしては中世ヨーロッパ風。背景を一枚書いてもらって、それを雑誌のバックに載せますから、それにプラスして本編の一場面を抜き出してください。当然ながら新連載なのでキャラクターの設定表なんかありませんからね」

「・・・・・・・・え？」

え、って。言ったじゃないですか、と矢倉は頬を膨らました。

どーでもいいけど、んな顔しても可愛くもなんともねえよ。

「だから、作者さんと直に話し合ってももらってもいいですけど、キャラクターのビジュアル、背景設定、全てこちらに任されていますから。大丈夫なんですよね？」

「大丈夫じゃないー！」

何だそれ、いやキャラクター作りに手を付ける方が珍しかったりもするかもしれないけど最近挿絵の仕事なんてほとんどなかったから作業全工程忘れてたよ。そういう人は確かにいるケドすっかり忘

れていた、っていうか考えたくなかったどうすりゃいい！

そうだな、こんな時こそまず原稿設定だ、見た目の描写があるはずだ。

「……オレ、先輩が先月も同じようなこと言ってたような気がするんすけど」

「奇遇だな、俺もだ」

部屋の奥で再度なされたため息の二重奏は、最早俺の耳に届く事はなかった。

No. 7

「矢倉、本探してきて」

「隣の机に置いています！ 詳しい参考資料が必要ならすぐに図書館なり本屋なり行きますから、取りあえず目を通してください」

「さんきゅー」

矢倉の折角の長台詞だが全部聞いちゃられない。

ポイントっぽい背景に貼り付けられた付箋のページを次々に開いていく。

「コレよさそう、んで下は……」

服装は決まった、ビジュアルはこんな感じ。挿絵は何とかなる。

あとは背景デッサンと色塗り！

時間がない！

これ以上ないってくらいに集中しすぎて頭が痛くなってくる。

「先生、お茶です」

「……」

「先生！」

「んー」

ぐい、と一口飲むとすぐに隣の机へ置く。

俺はすぐ水分補給を忘れるので、このままいくと無理やり飲まされてしまう。

「ミモー？」

「……リツカ？ 悪い、今仕事中だから。矢倉のところ行ってくれるか？」

「分かった」

素直な返事が返って、すぐにパタパタとスリッパの軽い音が遠ざかっていく。

眠りから覚めると不安になるようで、家に着たばかりの頃は、仕事中だろうが風呂に入っているようがお構い無しに側に居たがったが、今では聞き分けが良くなった。

しかし不安になるというのは、リツカの前にいた環境のせいなのだろうか。

一度なんか夜中に目が覚めてパニック状態になってたときがあったし……

「いかん、集中集中」

あとは色塗りを完成させればいいだけだから。もうちょっと待っててくれ。

「終わったぁー！」

頭の中では惜しめない賞賛の拍手が送られ、ファンファーレが鳴り響いていたが、部屋には誰もいなかった。

「あれ……皆帰ったのか？」

しーんとした部屋。

隣に行っても、台所に行っても気配がしない。

「まさか寝て……ないしなあ」

どこ行っただ、皆が帰ったり、遠出をしたりするならメモ書きくらい残すだろうし。

リツカがいないってことは……

「矢倉さーん、こっち終わったッスよー」

「ありがとうございますー。じゃあその袋に詰めていただけますかー？」

「はーい」

「え、草取りしてたの？」

ドアを開けると、玄関前から久しぶりに見た土の色が広がっている。

声をかけるのと同時に、汗まみれの青年二人は爽やかな笑みを浮かべた。

「深川も矢倉も……ありがとうございます」

「いえいえ」

「私もそろそろ」

「そういえば、リツカとアンミツは？」

「ああ、先輩たちなら買い物です。夕食の材料買ってくるって言ってましたよー」

深川は軍手の甲の部分で汗をぬぐった。

指先に付いた泥で額が汚れる。

「お前汗だくじゃん。湧いてるから風呂入ってけよ。矢倉も入るか？」

「あー……いえ、私は自宅で入りますから。深川さん、どうぞ」

「いいんですか？ オレ着替え持ってきてないですけど」

「俺の貸してやるからさ、後で持ってくよ。食事前にさっぱりしとけ」

「すいません、じゃあお先に」

「んー」

それから十分ほどして、リツカとアンミツが帰ってきた。

アンミツは両手にバッグをぶら下げ、リツカは上機嫌で小走りに近づいてくる。

「おいおい、転ぶなよ。おっ、ソフトクリーム買ってもらったのかー？ よかったなー」

こく、と嬉しそうに頷きながら食べかけのコーンを差し出す。

一瞬戸惑いながらも、一口かじるとさくつとした懐かしい感触とミルクの味が広がった。

「甘い？」

「ん、美味しい。ありがとなー、リツカ。俺は十分楽しんだから、残りは食べていーぞ」

うーんだか、ふーんだか曖昧な返事をする、リツカは満面の笑みでコーンにかぶりついた。

早速口の周りが粉とクリームで汚れる。

「そうだ、リツカ。ちゃんとアンミツにお礼言ったか？」

「――！」

ぴく、と兎のように耳が動いた。

どうだったのかと必死に思い出しているのだろう。

動きを止めて考えたが、どうやら言っていなかったのか口を離して、アンミツに向き直り、どうもありがとう、と礼を言った。

「どういたしまして」

無表情男は珍しく微笑み、早く食べないと溶けるぞなんて、子ども思いの言葉をかけている。

「……何なんだその顔は」

「俺は昔からこんな顔だ。え、何。俺今どんな顔してる？」

「笑いをこらえているような、泣き笑いのような面白い表情してますよ」

面白って。

芸人じゃないんだからー。

矢倉は俺の落ち込んだ様子に触れることなく、アンミツから受け取った材料をキッチンまで運んだ。

っていうかお前、原稿はいいのかよ？

No. 8

宵の風が部屋に入り込み、遠くでは虫の鳴き声。

くつくつと煮込まれた醤油の匂いが、懐かしさを感じさせる。

「日本だなー」

「生まれてから日本以外の国に行ったことがあるのか」

「ねえよ。お前と違って俺は現状に満足してるの」

俺が湯気に包まれた肉団子を頬張ると、アンミツも同じタイミングでよそった白ネギを口に含んだ。

ぱく、と白米を頬張る。アンミツも同じタイミングでほかほかの飯を口に。

ぐびび、とビールを飲む。アンミツも同じタイミングでグラスを傾けた。

「あーもう、真似するなよな」

「真似をしているつもりはない。お前こそ真似するな」

「こっちだって真似してねえよ！」

矢倉が鍋から肉とキノコを俺の皿によそってくれた。

「お、サンキュー」

「野菜も食べろ」

「んだよ、口うるせえ」

「……………もう馴染みの光景になりましたよねー」

深川が冷めた目でこっちを見やる。

俺、アンミツを順に見ると、また俺に視線が戻ってきた。

「そうですね」

矢倉は困ったように笑いながら、次々と鍋から全員の皿によそう

作業を繰り返す。

締めうどんも常備済みだ。

「しかし、夏に野郎四人で鍋って。暑苦しいにも程があるよなー」

「リッカだって男じゃないですか」

「まだ成人してないし、見てても暑くないしー。ああ、リッカ。口の周りベタベタ。ほら、口拭いて。ティッシュ、ティッシュ」

「先輩は独身なのにすでに父親みたいですねー」

嫌がるリッカの顔を押さえて、口の周りを拭いてやると、深川はくすくす笑った。

「お前もこぼしてるだろう」

「飛びやすいんだよー。ちょ、痛いつて」

「じゃあ天満さんは、先生のお父さんって感じでしょかね」

ふん、と深川は鼻を鳴らすと、ビールを飲んだ。枝豆を二つ同時に口の中へ入れると、押し流すようにまたあおる。

いい飲みっぷりだった。

「では、私はこれで。先生、お疲れ様でしたー」

「おう、気をつけて帰れよー」

酒を飲んだというのに矢倉の足取りは確かなものだった。

飲んだといっても小振りのグラスに一杯だけだ。

姉は皆酒豪だと言うから、大丈夫だろう。

酒に酔っ払ってへろへろになるイメージしか思い描けない矢倉も、もしかしたら酒豪なのかもしれない。

「おっと」

目の前がぼやける。

階段を踏み外しそうになって、アンミツと深川が同時に支えてくれた。

「飲みすぎだ」

「仕事が終わって嬉しいのは分かりますけど、もう寝ましょうよ先輩。それともお風呂入ります？ 背中流しますよ」

「いい、眠い……」

学生時代から知っているこの二人の前だからか、急に酔いが回ってきた気がした。

ふわふわとした心地よい眠気が襲ってくる。

浮いたり沈んだりする意識をどうにか押しのけて、歯を磨いてトイレを済ませる。

「はい、先輩着替えてくださいねー」

「さっさと脱げ、洗濯機回しておくからな」

「シャツも替えておきました。布団も干しておきましたから、ふかふかですよ」

「リツカはもう寝てるから、起こさないように静かにしろよ」

「じゃあ、先輩。オレ達はこれで帰りますけど……」

「帰るの、か……」

ぼんやりした頭で問いかける。

目の前の男二人は、同時に顔を見合わせた後、どちらか残りましょうか？ と聞いてきた。

俺は酒に弱い。

それは二人とも知っている。

いつもと違う言動をするかもしれない事は十分承知済みで、だから心配なのだろう。

そうして目覚めた後、酔っていたくせに痴態をさらしたことだけはしっかり記憶している俺が、壊滅的なダメージを負わないように、守ってくれるつもりだ。

でも、二人に迷惑かけちゃいけない。

分かっていたはずなのに、もう何も言えずに首を折って、くたりと体を預けてしまう。

遠くでちよつとだけ呆れたように笑った、誰かの吐息が聞こえた

ような気がした。

No. 9

「先輩、明日仕事じゃないんですか？」

「まあな。一応此処でも支度は整えられるし、車だから家に寄っても、直接会社に行ってもいい。何にせよ、今日こいつが一人っているのも危なっかしい気がする」

「だからお父さん、なんて言われるんスよ」

「お前は？ 学校には間に合うのか？」

「あー、かなり早く行けばってところでしょーねー。大丈夫ッス、自転車ですから」

車に対抗できるのは小回りが利くところだ。

ささやかに笑ってみせると、天満も同じように僅かに微笑んでみせた。

そうしてから天満と深川は手分けをして家の戸締りと、この家の主やリツカの世話を済ませると、それぞれ床についた。

口に出さずとも、思うことは同じ。

安らかに眠れますようにと。

目が覚めてしまった。けれど視界は真っ暗。

いつから世界はこんなに暗くなったのだろうか？ そんな、ばかなこと考えられているうちはまだ大丈夫。

いつも椅子に座っているせいで癖になってしまった背伸びをしたが、気だるさが体に残っている。

隣ではすうすうと規則正しい、リツカの寝息。

頭を撫でてやると、そのリズムがほんの少しだけ乱れて、僅かに口元が上がる。

最近は真夜中に起きてしまうなんて事はなかったのに、一体どうしたのだろう。

酒を飲みすぎてしまったのだろうか？

とにかく水でも飲もうと、台所へと向かう。

抜き足、差し足、忍び足。

そろりと部屋を抜け出し、水の流れる音を聞くだけで気分が落ちていく。

流し場から立ち去ろうとすると、ガサリと妙に響く音がして、思わず身を硬くした。

「・・・・・・・・ったく、脅かしやがって」

B級ホラー映画ならこの後すぐに狼男でも出てきそうな台詞を呟いたが、なんのことはない。

自分の足がプラスチック製品を入れたゴミ袋を蹴ってしまっただけのことだ。

気を緩め、満月はとうに過ぎてしまったが、それでもまだ明るい光を放つ月を窓越しに見上げる。

窓枠に囲まれた世界。

草木と月光に照らされる薄暗い雲をまるで一枚の絵のように彩り、それを縫いとめているかのように、月が重く見えた。

木の葉の影が段々大きくなるような気がして、目をそむける。

らしくないけれど、なんだか気分が重くなっているらしい。

早いところ寝てしまいたい。

けれど、こういうときに限って眠気というのは訪れない。一体俺の神経はどうなってるんだか。

一人ため息をつく。

そうして部屋をゆっくりと見渡す。

電気を落としているせいで全体は薄暗いが、ゴミの影はほとんど

ない。

「リツカのおかげだろうな」

実を言くと、我家は汚かったのだ。ものすごく。

衣服、食器、寝具。

汚いまま放置して、本気で限界だろうという頃合になると、ようやく重い腰を上げて大掃除を始める。

そんな自堕落な生活をして過ごしていたのに、（本気でやばくなったら深川が掃除してくれたりもしたが）今ではリツカがいるのでそうもいかない。

なにしろ、とある国の王子様です、と公言すれば百人中九十八人くらいは信じそうな美少年だ。

美しいものは美しいまま眺めたい。

駆け出しとはいえ、イラストレーター兼小説家としては、美意識を取り戻してくれる貴重な存在だ。

それに、埃で死ぬ事はないだろうが、アレルギーになってしまったり可哀想だし、俺みたいの不健康な生活をしているヤツの側にいる上、乱れた食生活をさせてこれ以上健康を害させてはいけない。

なにより食器を重ねて置きっぱなしにすると、引っかかった拍子に食器が割れて怪我！

なんてことになったらもっと可哀想だ。

そんなわけで、ちょこちょこ掃除するようになった。

最初の頃は美少年らしくなく、風呂を嫌がる素振りも見せたりツカだったが、今では嬉しそうにしている、一緒に入ることもある。

大分お互い慣れてきたようだ。

良い傾向だ。

「いや、まで。別に好きだからとかそういうことじゃなくて、ただ単に仕事に役立つし、その、家事をやってくれるんだから大切にしないでいいけないというわけでエ……」

このとき。

聞いているはずがない誰かに必死に言い訳をしていた俺は気づかなかった。

後ろにぬうっと立っている影の事を。

奴は、すぐ傍まで来ていたのだ。

No. 10

「眠れないのか」

「……いきなり話しかけるなよ。気配がなかったぞ、お前」
それはすまないな、と。

全く悪いと思っていない、いつもの無表情でアンミツは応じた。

「……」

「……」

「……何か喋らないのか？」

「——え、ごめん。お前何様？ いやいや、どーせ常套句だよな。

『俺様だー』とかいうんだろ。もういいよ、言われる前の杖だよ。
っていうかさあ……」

「なんだ」

喋らないのときたから思いつくまま喋ってやったのに、一言で返
しやがった。

「俺ってそんなに喋るイメージなのか、お前の中では」

「少なくとも、静かじゃない。だから、今は変だ」
変！

いやあ、アンタ。

面と向かって「変」て。

顔か、声か、DNAでしか解決できないようなレベルなのか。
身長とかいったら容赦しねえ！ お前が規格外に高いだけだ！
思わずぽんぽんといつもなら言い返しそうな言葉は、今は出てこ
なかった。

なんだか調子が狂っている。

「そうなんだろうな。酔ったらしい」

「一日中か」

「そうかもな」

こういうヤツって苦手なんだよな。見てないようで見てるんだから。

なんだかんだで、深川も結構鋭いし。

何、俺って本当は分かりやすい奴なのか？

思わず考え込んで、今度は口に出していなかっただろうかとアンミツを伺ったが、当の本人は何も言わないので、どうやら聞いてはいなかったらしい。

「おい」

「ん？ アンミツ、俺はお前に何度も言っていると思うんだが、人を呼ぶときに『おい』だけじゃあ社会生活において支障をきたすんじゃない」

「そんな事はどうでもいい」

「んなこと……分かった。やっぱりお前とは相容れねえ」

「見ろ」

珍しく切羽詰ったように、アンミツの瞳が揺れていた。

ぐい、と無理やり視線を変えさせられる。

外だ。

月夜の晩。

それだけかと思っていた明るさは、どうやら違っていったらしい。庭が、不自然に明るかった。

No. 11

「ウチの庭って光ったのか？」

「俺が聞きたい。発光植物でも植えているのか」

「いやあ、今のところ園芸に興味ないんだよなあ。お前は？ どっかの洞窟に探検しに行ってヒカリゴケとかくつつけてきたって可能性はねーの？」

——ない。

素っ気無く返すアンミツの返答もそこに、俺の脳は乱回転していた。

庭が不自然に光っている！

宇宙人襲来？

それ以前にいろのか。

妖精のダンス？

妖精自体存在を信じてないくせに。

まさか流れ星が落っこちた？

だとしたら隕石だ。光らないんじゃないじゃね？

もしかしてレベルアップ？

何のだよ。この世界は実は電脳世界でしただってか。

それとも不発の爆弾でも埋まってた？

いやいや、洒落にならないから。

あ、なんちゃってかぐや姫でも生まれてるのかもー。

そうだったらどうしよう。食費はかさむけど、リツカに兄弟ができていいかも。

俺結婚してないのに子どもばかり増えていくなあ。

でも、もしかすつとあれかも。

異世界への扉でも開いたのかもしれない。

やった、もう締め切りに泣かされる事はない！

でもなあ。勇者として召喚されました。

ドラゴン倒してください、なんて言われたら俺真っ先にやられそう。

勇者だったらまだいいけど、魔王とかだったら一週間は落ち込むぜ。

あ、でも部下が蛇とか蝙蝠とかじゃなくて、普通に人間タイプだったらまだ救いはあるか……。

現実逃避すると、人間いろいろ思いつくものだ。

普段だったら真っ先に笑い出しそうな説が異様に出てくる。

それを察したのか、アンミツは俺の頭に手を当てていたが、その手を額へと移動させた。

「平気か？」

「気を失っていないとこ見ると、そうなんだろうよ」

そんな柔な神経なんぞ持ち合わせちゃいないと、自覚しているけども。

「さて、原因究明に行くか」

ようやく重い腰を上げ、庭へと繋がっている引き戸を開けた。

アンミツが割り込むように先に出る。

一人で格好つけようたって、そうはいかねえ。

横に並んで歩き出す。

光っている方へ行くと、影絵のように立っている人影が見えてきた。

どうやらこちらには気づいていないらしい。

「——ッ!？」

視界がぶれる。

気づいた時には肩に手が回り、アンミツのほうへと引き寄せられていた。

耳元でヒュンツと風を切る音が聞こえて、人影へと向かう。

「サンキュ」

しかし、庇ってくれるのは嬉しいんだが何か言えよ。

誰だって驚くよ。

コイツらしいっちゃあ、コイツらしいんだけどな。

口元に苦笑いを浮かべながら、肩に置かれたままの手を振りほどく。

「今のお前か？」

「違う」

じゃあさっきの音は何なんだ。

よく分かん。

だから俺は、とりあえずこう言う事にした。

「その不法侵入者さーん、出て行ってくれませんかねえ」

「気づかれるだろ」

「気づかれるように話しかけてんだよ」

「先手必勝って言葉知ってるか」

それくらい知ってるって。

俺のことをどんだけ馬鹿にしてんだ。

つつうか………。

「なんで戦闘態勢なんだよ」

「真夜中に発光して人ん家にいるような奴が、真っ当だと思うか？」

「思わねーけど、とりあえず此処は俺んちだからな」

一応訂正しておく。

「やあ、これは失礼」

光の向こうから胡散臭いほど穏やかで、礼儀正しい声音。
嫌だなあ。

こういう時って、少しくらい人間の小ささが出てたほうがやりやすい感じがする。

狭量だとか、ふてぶてしいとか。

ニコニコ笑って腹の中で何考えてんのか分からない、そんな奴ほどやり難い。

「・・・・・・どちらさん？」

「預かってもらってたものを、受け取りに来たんだ」

預かりもの。

ここでもいつもの俺ならば、ありもしない宅配便でも思い出ししていただろう。

けれど、俺が真っ先に思い浮かんだのは。

茶色がかった金髪に翠緑の瞳をもつ、ちょっと生意気な美少年の顔だった。

ああ、ホントに。

さよならは、いつも突然。

No. 12

「預かりもの？ 知り合いか？」

腑に落ちない様子で、アンミツは囁く。

内心うろたえている様子は見せてやるものかと、アンミツと光の中にいる奴双方への意地で、努めて平静な声を作り出す。

「顔も見せないような非常識な知り合いは、お前くらいしか思いつかない」

「顔見せてるだろうが」

「非常識ってトコロに反応しろよ」

意味もない会話でも、交わしていないと混乱するあまり笑い出したくなる。

そうこうしているうちに、人影が動いてこちらを見たのが分かった。

段々そいつが手にしている光が和らいでいく。

手に持っていたのは、懐中時計だった。

遠目だから詳しくは分からないが、かなりの年代物のようだ。

黒いロングコートの胸ポケットに仕舞うまで、それはぼんやりと光っていた。

「そうか、あの子は大分可愛がられていたようだ。礼を言うよ」

ほんの少しだけ首を傾けながら、人のよさそうな笑みを浮かべて、男はそういった。

五十代になるかならないかくらいの男性で、白髪交じりの豊かな頭髪を後ろ向きに撫で付けている。

「アンタ、誰だ……？」

「そうだな——科学者の、緑青という者だ」

「何なんだよ、その間は。偽名ってこと？」

「それも、科学者？」

俺の中では白衣を着ていて、しかもちよつと薄汚れたイメージだったのに。黒のロングコートって、有名な医師免許剥奪医師みたいだな。

「こちらの言葉では、そういう名前だ」

「外国の方ね」

緑青はちよつとだけ可笑しそうに口の端を上げた。

「なんか黒い。」

「全体的な雰囲気は黒い。」

「やだなー、俺みたいな平凡な一善良市民が敵いそうもないなー。」

「どこの誰が善良市民だ」

「……俺また口に出してた？」

「こっちを振り返らずにアンミツは頷く。」

目は警戒するように緑青を睨みつけ、片手は俺の行く手を遮るようにして伸ばされていた。

「あの子、というトリツカの事か」

「リツカ、ねえ……」

緑青はそのまま、リツカの名前を数回口の中で転がした。

「君の家に居てもらったのは正解だったようだ。随分と感情が豊かになってきている」

「あのふざけた手紙を送ってきたのもアンタか」

「手紙？——ああ、下僕賞当選の」

「そうだよ、とまるで幼い頃に可愛がった甥でも見るような目でこちらを見つめる。」

「基本的なデータは見させてもらった。一人身で、義侠心があり、何より情に厚い」

誉められても嬉しくないという体験を、俺は初めて味わっていた。
どうしてだろう。

この先に何か落とし穴があるような気がしてならない。
それはアンミツも同じだったらしい。

「個人情報保護法に違反している気がするが」

「それは知らなかったな」

煙に巻くような言い方に、アンミツの無表情が僅かに動く。

「無作為に行なった抽選なんだろう？」

「そう。抽選で偶然当選した君は厳選されたデータの中から当選だ。
おめでとう！」

言葉遊びが気に入ったらしく、棒読み状態で祝福の言葉を述べてくれる。

「そりゃ、どーも」

ありがとよ。

「あ………？」

緑青が懷に手を入れると、突然キインと空気が凍ったような気がした。

しかしそれも一瞬の事だった。

すぐにアンミツが俺の耳をふさいだからだ。

だからっ、そんなことする前に言え！

そして自分の耳をふさげ！

「さっきから人の家で何をしているんスか？ そのオッサンは」
「だからー、お前らなあ。ここは俺んちなの」
後ろからはぼうっとしたリツカと、その肩を抱く深川の姿が近づいてきていた。

「やれやれ。人が集まってきてしまったな。折角人目を忍んで、こんな夜中に出てきたのに」
ひどく楽しそうだった。

まるで大勢の観客が入った劇場で、舞台に立っているかのように。
「人に慕われているようで、羨ましいよ」
目の前にいるこの男は、果たしてそれを羨ましがるような人間なのだろうか。

緑青はなおも続ける。

「本当ならもう少しデータを取って、それから引き取りに来るつもりだったけど、こうなったら都合が良い。今リツカを引き取らせてもらう」

「ちょっと待て」

俺は、思わず声が高くなっていた。

自分でも驚くほど大きな声だったので、今度は意識しながら声を潜める。

「緑青さん……アンタは、あの子の、なんなんだ？ リツカはアンタの子どもなのか？」

「そうだね。どういうカテゴリーに属するかと問われるならば、子どもというしかないだろうね」

「アイツはココに来た時、ほとんど感情表現の術を知らなかった。言語は堪能で、たまに俺でも驚くほどの知識を披露してくれたりはしたが、笑わなかった。おまけに、見るもの、聞くもの全てが始めてといった様子だ。アンタ、一体この子をどう扱ってきたんだ？」

親なら、子どもに愛情をそそいで、一緒にいてやって、いろんなことを学ばせて、幸せになってほしいと願うものなんじゃないのか？ 何もない部屋で、ただただ軟禁するように無意味に育ててきたのか？

眉を顰めたアンミツに、深川。そして肩を支えられているリツカ。彼らの顔を眺めてから、緑青は薄ら笑いを浮かべた。

「A v i — d o b o 9 0 7 1 6 b。それが彼の名だ」

「あびどぼ、きゅう・・・？ アンタもしかして。子どもをナンバーで呼んでたのか？」

「そうだよ。彼は私が作った」

「ふざけるなよ、そんな非人道的な！」

親だから子どもをどう扱ってもいい、なんて理由あるか！

こんな無感情な奴に育つわけだよ！ 今は違うけど！

俺は自分で思っているよりも怒っているのだろう。

血圧が上がっているのか、ずきずきと頭が痛い。

そして俺が激昂する様子を、緑青は面白いものでも見たかのようにしげしげと見つめていた。

「彼が無感情だったといったね。そして今は感情が豊かになってきている」

俺が頷くのを確認してから、続けた。

「それは当たり前だ。元々感情プログラムはあった。しかし、経験が足りなかったから表現の術もタイミングも知らない。フィードバック機能によって学習し、より人間らしくなっていた。今日はその学習度合いを確かめに来たんだ。そうして、どうせなら引き取る

うと、さっき信号を送ってここに呼び出した」
「ぷろぐらむ、ふいーどばっく？」

はてなマークが頭上に埋め尽くされているような感じた。
混乱してきた俺の隣にいるアンミツは、何もかも分かったような
顔をして、なるほど、と呟く。

「リックはロボットか？」

「ご明察。私のいたところではマホルと呼ばれている。人間としての
感情を併せ持つ、希少なドール。私の作品だ」

それで子どもというしかない、わけか。

「そ、でも、そんなこと、あるわけ、ないじゃん。なあ、アンミツ・
・・・・・・」

口では否定しながら、声は震えていた。

No. 14

声は、震えていた。

目は、アンミツを見ないまま、心ここにあらずのリツカを凝視する。

ロボット？

漫画でよくある、ヒューマノイドとか、アンドロイドとかいうやつ？

あんなに綺麗で、可愛くて、生意気そうで、人間そのものなのに？

「だって、飯食うんだぞ？」

「食べ物を摂取してエネルギーを作り出す仕組みは、本当に苦労するよ。効率を図るために、日光と水だけでも幾らかは稼働できる」

「水を浴びたって、平気だった」

「人工皮膚で覆われているからね。間接はきちんと塞がれている」

「それに、あんなに不器用で……」

「バランス感覚も、手先の器用さも設定はしてあるが、成長にしたがって身に着けていくんだ」

「黙ってろよ！」

何だって？

リツカがロボットって、何なんだ？

そんなわけがないじゃないか。

こんなに生き生きして——人間、そのものなのに！
どうしてだろう。

何でこんなに裏切られたような、複雑な気持ちになるんだろう。
指先にまで心臓の鼓動が感じられた。

頭はぐるぐる回り、事態についていけやしない。

「未聞、落ち着け」

「落ち着いてる。十分落ち着いてるさ、これ以上ないくらいの落ち着きぶり。どーよ？」

「どーよ？　と言われてもな」

落ち着いているようには見えない、そうかそうか。

うん、俺もそう思う。

俺の馬鹿野郎。

いつからこんなに突発的な事態に弱くなっちゃったんだ？

突発的事態なら、勘違いしていたギリギリの締め切りで慣れているはずなのに。

「一つ聞きたい。お前、リッカに何かしたか？」

さっき緑青は、リッカを呼び出したと表現したはずだった。

それにつられてここへ来たのまでは分かったが、あのぼんやりした目にどうにも胸騒ぎがしてならない。

「この装置……君たちの世界じゃ、懐中時計だったか。日常生活で持っていてもおかしくない形をしている、小型サイズの経値測定装置。そして、A v i — d o b o 9 0 7 1 6 b の位置を特定した周波数を受信する仕様にもなっている。彼を呼び出すことも出来る。どうやら君は、その余波を受けたようだね」

アンミツが無言で頬に触れてきた。

滑らかな感触に、傷がついているのだと知る。

「親父にもぶたれた事ないのにー」

「なんにでも寛容であるという姿勢をとっている社会が生み出した、過保護な教育体制は人間の人格形成に大きく影響を及ぼすと思うんですよね」

「それでこんな奴が出来上がるわけか。とてつもなく問題だな」

「——ってオイ！　ネタだろ、ネタ！　なんなんだよ、深川まで！

——どいつもこいつも好き勝手・・・」

まあ、元気は出たけどさ。

その言葉を、やはり俺は口に出していたらしい。

先ほどから緑青を睨みつけたまま、こちらを見ようとしなかった二人が、同時にちらりと笑みを浮かべる。

「リッカを呼び出したのは聞いたさ。だけど、何で生みの親のアンタを見ても表情一つ変えないんだ」

「催眠状態、のようなものだね。こちらが握っている主導権の一つで、プログラムを書き換える、もしくは書き込む前の待機状態にさせている。分かりやすくいうなら携帯電話の待ち受け画面ってところだろうか」

「書き換える・・・っていうのはどういう？」

「仮プログラムを実行させることもできる。例えば、君ならリッカがどんな性格だったらいいなと思う？」

リッカが、どんな性格だったら、俺はいいなと思うか——。

「別に、今のままで十分満足してるよ」

すると緑青は、頭の悪い生徒に根気強く教える教師のように、ちよっとだけ呆れた目をしてみせる。

「例えば、の話だ。こんな感じの性格のリッカだったら、どう反応するんだろうか、とか」

例えば、ね。

そうだなあ・・・。

悔しい事に、リッカって美形なんだよな。

実際、俺の周りにいる奴は不細工とはいえない顔のつくりをしている奴ばかりだ。

ふとその代表的ともいえるアンミツの顔を二秒くらい見つめて、俺は口を開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1609ba/>

「下僕賞「当選のお知らせ」 （なお、抽選は応募の有無にかかわらず無作為

2012年1月9日19時45分発行